

現場レベルでの家畜福祉評価に関する国際ワークショップ参加報告

瀬尾 哲也 (帯広畜産大学)

秋の気配が感じられる9月10日から13日、ベルギーのゲント大学で行われた International Workshop on the Assessment of Animal Welfare at Farm and Group level (WAFL) に参加した。このワークショップは、3年に一度開催されるもので、1999年コペンハーゲンから始まり、前回は2003年のウィーンで開催され、今年が4回目である。参加者はヨーロッパの研究者が大半であるが、カナダ、アメリカ、オーストラリアからの参加もあった。またチリ、ウルグアイ、メキシコなど Welfare Quality プロジェクトに加わった国からの参加者も目立った。参加者は総勢260名である。家畜福祉評価だけのワークショップでこれだけの人数が集まるということは、いかに家畜福祉評価法が注目されているかがよく分かる。日本からは、茨城大学の小針大助氏、麻布大学の新村毅氏が参加した。

招待講演、口頭・ポスター発表ともに8つのセッションがあり、家畜福祉指標の自動記録法の開発と改良、情動および人間と動物の関係評価、家畜の遺伝的改良による福祉の向上、家畜の健康評価、家畜福祉法の開発と改良、フリー・トピック、ステークホルダーの意向、家畜福祉評価法の現場への応用であった。また5つのワークショップ(乗用馬、動物園、粗放的生産システム、跛行、家畜福祉法)も開催された。

ポスター発表の時には、7種類ものベルギービールが提供され、グラス片手に討論した。またコーヒーブレイクの時にはベルギー名産のチョコレートやワッフルも堪能でき、食べるのも忙しかった。

今回我々が特に注目していたのは、2004年に始まったEUの家畜福祉研究プロジェクト Welfare Quality の進捗状況である。既に家畜福祉評価基準が作成されており、それをもとに実際に農家レ

ベルで適用した乳牛と豚に関する結果報告もあった。乳牛では、good feeding, good housing, good health, appropriate behaviour という4側面から12の評価大項目が作成され、最終的に Excellent, Good, Basic, Not classified の4段階で4側面ごとに評価し提示するというものであった。実際の評価の結果調査者間の信頼性(誤差)やトレーニングの必要性、動物ベースの評価指標は長い調査時間が必要であったこと、放牧地での福祉評価に関する研究が少ないなど、実際的な問題点も挙げられた。また、我々も発表した ANI (Animal Needs Index) 法については、イタリアでのANI法を改良し、オーガニックファームの評価を試みた発表しなかった。

この他、管理者の接し方と生産性との関係に関する発表も多く、ブタの去勢が将来的に禁止されることを見通し、遺伝的改良によりアンドロステロン、スカトール、インドールの発生を抑制しようとする研究も興味深かった。さらに、ウシ、ブタ、ニワトリ、ウマ、ヒツジといった家畜以外にも、魚類やウサギに関するポスター発表もみられた。

次回2011年の本ワークショップは、行動研究者にはおなじみのカナダのゲルフ大学で開催されることが発表された。

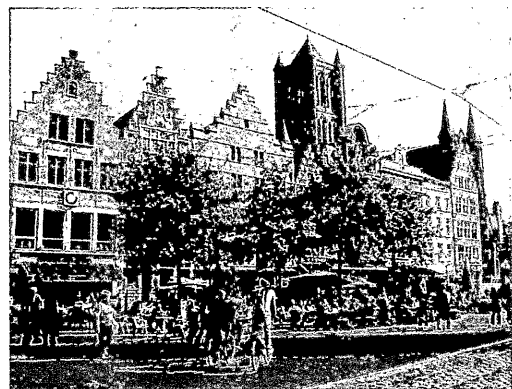


写真 ゲントの街並み